

子宮頸がんは **検診** で **予防** できる！

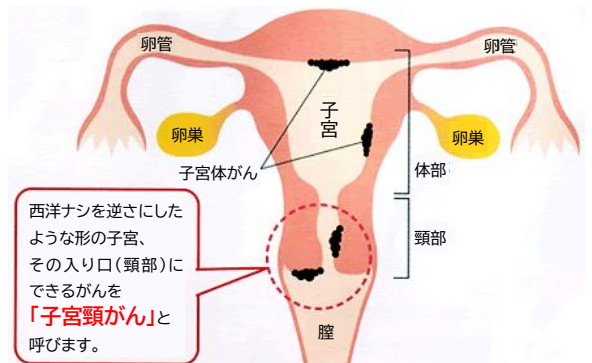
子宮頸がん検診を 受けましょう！



20~30代の女性に増えている「子宮頸がん」

子宮頸がんは、子宮の入り口の子宮頸部とよばれる部分から発生します。子宮の入り口付近に発生することが多いので検査がしやすく、発見されやすいがんです。また、早期に発見すれば比較的治療しやすく予後のよいがんですが、進行すると治療が難しいことから、早期発見が極めて重要といえます。

子宮頸がんは子宮がんのうち約7割程度を占めます。以前は発症のピークが40~50歳代でしたが、最近は20~30歳代の若い女性に増えてきており、30歳代後半がピークとなっています。日本では、毎年約1万人の女性が子宮頸がんにかかり、約3000人が死亡しています。また 2000年以後、患者数も死亡率も増加しています。

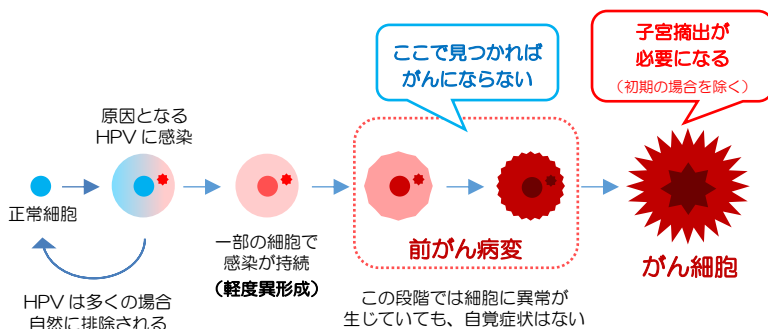


子宮頸がんは「HPVによる感染」が原因

子宮頸がんのほとんどは、ヒトパピローマウイルス (HPV) というウイルスの感染が原因であることがわかっています。HPVは性交渉により感染し、多くの女性が一生に一度は感染すると言われる、ありふれたウイルスです。通常はHPVに感染しても、自身の免疫の力でウイルスが自然に排除されますが、約10%の人ではHPV感染が長期間持続します。このうち自然治癒しない一部の人は異形成とよばれる前がん病変を経て、数年以上をかけて子宮頸がんに行進します。

HPVには100種類以上のタイプが存在することがわかっています。子宮頸がんに関係するHPVは主に14種類のハイリスク型HPVと呼ばれるウイルスですが、中でも特に HPV16型、18型が子宮頸がんに進展する可能性が高く、感染した後に悪化するスピードも速いといわれています。

《子宮頸がん細胞の発生メカニズム》



《若い女性に多い HPV16、18 型》



HPV16、18型
= 日本の子宮頸がんの **約70%**

20代の子宮頸がん(I期以上)の90%
30代の子宮頸がん(I期以上)の76%

自覚症状がないから気づきにくい

子宮頸がんを発症し、がんが多少進行しても、**自覚症状はほとんどありません**。不正出血や下腹部痛は、頻度がそれほど多くなければ様子を見てしまいがちな症状です。仕事や家事で忙しいと、なおさら病院から足が遠のいてしまうかもしれません。しかし、もし子宮頸がんだった場合、症状があるということは病状が進んでいる可能性があるということです。定期的な検診を受けるとともに、異常を感じたら、念のため病院を受診するようにしましょう。

初期の子宮頸がん

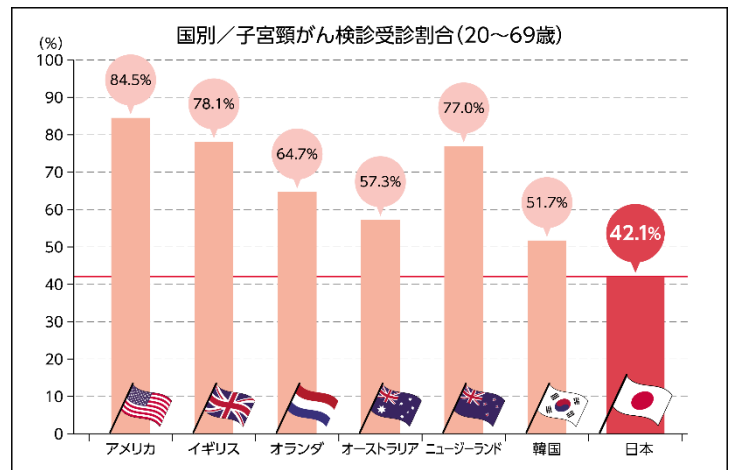
症状はほとんどない

子宮頸がんが進行

- ・月経でないときの出血
- ・性交時の出血
- ・おりものの異常（茶褐色、黒褐色などのおりものが増えるなど）
- ・下腹部痛や腰痛
- ・排尿障害、排便障害
- ・血尿、血便

子宮頸がんは予防できる！

子宮頸がん検診は、性交経験のある 20 歳以上の女性で 2 年に 1 回受けることが推奨されています。子宮頸がんは、**初期に自覚症状がほとんどなく、さらにはがんに移行するまでに年月がかかります**。がんになる前の状態を早期に発見して治療できれば、**ほぼ 100% 治ります**。そのため、定期的な子宮頸がん検診を受け、早期発見につなげることが大切です。しかし、日本の子宮頸がん検診の受診割合は 42.1% と、他国に比べて低いというデータがあります。



子宮頸がんは 30 代後半で多く発症しています。この年代は子育てや仕事で忙しく、また主婦では健康診断を受ける機会もなく、会社の健康診断でも検査項目から外れている場合があります検査の機会がないのが実情です。また婦人科の受診に抵抗があって、検査を先延ばしにしている人も多いと思います。メスプの子宮頸がん検診は、自分で膣の中に綿棒のような器具を入れて細胞を採取して郵送するだけです。リラックスした状態で検査でき、痛みもなく簡単です。

また、子宮頸がん検診とあわせて有効な予防法といわれているのが、HPV ワクチンです。HPV16 型、18 型の発がん性が高いため、ワクチンを接種することで予防を目指しています。ただし、HPV ワクチンを接種したあとも、定期的に子宮頸がん検診を受けることが大切です。HPV ワクチンで完全に予防できるわけではないため、子宮頸がん検診を受けることで、予防の精度が上がります。接種する場合は、副反応やリスクに関する情報を得て、理解してから接種するようにしましょう。

※現在、HPV ワクチンの公的接種は、小学校 6 年生～高校 1 年生の女子を対象に行われています。